

しもつけ随想

一九六六年の春は、ニキ・ド・サンファルとジャン・ティンゲリーにとって、とてもドラマティックなシーズンとなりました。

その何年か前に、ストックホルム近代美術館の館長に就任していたP・フルテン氏の頼みで、スイスからはティンゲリー、フランスからはニキが、秋の企画展のために呼ばれました。ストックホルムはまだ雪の中で、スウェーデン人の造形作家P・ウルトヴェットも館長と一緒に空港に迎ええました。

四人は早速、どういう展覧会にするかという会議にとりかかりました。実はフルテン氏を中心に、このメンバーは、十年も前から「いつか、でっかい迷路(『ダイナミック・ラビリンス』ーダイラビ)をつくってみよう」と考えており、年が代わるごとに協議を

重ね、オランダやアメリカなどで、展覧会をしてきたのです。ですが、満足のゆくダイラビはなかなか実現しなかったのです。

この時も、具体的には何のアイデアも持たないまま集まっては、なしく討議を重ね続け、四人はへ

一同は、いつものように、昼食を食べ、車中で雪の中をウルトヴェット宅に向かいました。四月二十九日の昼のこと。やわらかい雨が音もなく降っていました。

と、その時。ぽつりとフルテン氏が言いました。「去年、ニキが

床に横たわり、それをティンゲリーがスケッチしたのです。

大きなナナ。これがのちに「女ガリバー」とか「鯨工場」「大聖堂」とあだ名された「ホーン(彼女)」の基本案となりました。その中の迷路、「ダイラビ」の達成

へ入り、「金魚の池」(贗作美術館)「恋人たちのベンチ」などを廻ります。到る所に仕掛けがあって、それが観客を驚かせたり、楽しませたりします。

例えば「恋人たちのベンチ」に腰掛けて、他愛もないおしゃべりを楽しんでいる恋人たちは、その会話が隠しマイクによって「カフェ」の中に放送され、お客の腹をよじらせていることを知りません。そしてまた、カフェの食器類は、動くベルトによって、粉砕機に誘導され、ガチャコンガチャコンと碎かれる、という按配。

三月月の期間で十万人の観客が入場し、「生まれ変わるって」出てきたというその「ホーン」は、身長二十四センチ、幅九センチ、高さ六センチあるということです。

(ニキ美術館館長)

ニキ・ド・サンファル③ 女ガリバー『HON』彼女の誕生

YOKO増田静江



とへとになりました。ついに、ティンゲリーが言いました。「めいめいで何かちょっとした小品かなんかを作って、この美術館に寄贈してから姿をくらましちまおうよ。ロシアのレニングラードなんかにさ」。重い沈黙が続きました。

発表したナナをき、横に寝かせてみてはどうだろうね……「うおおーッ」。突然みんなの心に明かりが灯りました。アイデア、アイデア、アイデア……ランチの席が盛り上がったのは、言うまでもありません。ニキは心もち足を広げて

です。もう、一同のろろしてはいられません。翌日から、手分けして材料の発注と準備に奔走したのでした。

では、「ダイラビ」の内部はどんなだったのでしょうか。観客は、両脚の付け根「生命の門」から中